

共翔

第20号

●…………… 目次 ……………●

- [巻頭詩] 実りある楽しき人生を！
(Productive and Stimulating Years of Life) 押谷 善一郎……………2
[ムネモシュネの鏡] 書物随想 山本 光久……………4
[検索ツール] ……………6
- [研究ノート] 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」資料調査をめぐって 加藤 美奈子……………8
[スタッフのオススメ本] ……………10
- [こども園スタート] 認定こども園 就実こども園の紹介 古川 恵子……………12
[研究室から] 記念写真－ボストン旅行記－ 川崎 剛志……………14
[図書館サービス] レファレンス・サービス 松崎 博子……………16
[essay] リアリティについて 小林 敦子……………18
- [図書館活用法] 面倒な調べ方にも意味がある 松尾 直昭……………20
- [学生のブックガイド] 大西 奈緒美 / 柴田 歩実 / 武政 汐香 / 森山 智代 / 見附 幸子……………21
[セミナーレポート] ……………23
[図書館マナー] 一緒に快適空間を作ろう ……………24

Productive and Stimulating Years of Life!

President
Zen'ichiro Oshitani

*Congratulate yourself with your friends filling a glass,
Drinking to the diploma you have got.
Throw away this evening the least of your regrets,
And put on a new garment of great hope for the future.*

*Celebrate yourself this evening raising a glass,
Drinking to your passing youth with bittersweet memories.
Remember a passage from Shakespeare's "all the world's a stage,"
And realize you have already gone through the first two.*

*Commit yourself not to despair while moving along the thorny path,
Bleeding in your heart with a heavy burden of despair.
Remember your sweet heart to imbue your mind with courage,
And thereby stand up against difficulties facing you.*

*Continue to cherish your dear dreams until the "last scene of all,"
Tasting a sweet and often bitter liquor.
Try to make them come true throughout your life,
And thereby have productive and stimulating years of life.*

実りある楽しき人生を！

学長 押谷 善一郎

グラスを満たし友らと祝いの杯を、

手にせし学位記のために。

今宵はいと小さき悔恨さえ投げ棄てて、

未来のために新しき希望の装いに身を包め。

はたまた今宵はグラスを上げてほろ苦き乾杯を、

過ぎ行く青春のために。

シェイクスピアの「この世はすべて劇場なり」の一節を思い浮かべ、

はや最初の二幕は過ぎしことを自覚せよ。

いばらの道を歩むとも諦めぬと誓え、

深き絶望に心が血塗られしとも。

されば愛しき人から勇気をうけ、

立ちふさがる困難に立ち向かえ。

人生の「最後の舞台」まで夢を棄てるな、

成功の美酒より数多の苦酒を味わいしとも。

生涯を夢追いし人なれば、

実りある楽しき人生となろう。

*本詩は 2012 年 3 月 20 日卒業式にて朗読されました。

書物随想

図書館長 山本 光久

近年、電子書籍が再び話題になっている。「再び」というのは、かつて携帯端末が市場に流通し始めた時、大手出版数社が共同してその開発・普及に乗り出したことがあったからだ。しかしこの時は未だ機熟さずというか、かなりの資本を投入したはずにもかかわらず、時の経過とともに立ち消えになった。そして現在、Kindleとか Readerあるいは iPadの登場とともに改めて電子メディアにおける書籍の新たな可能性がさかんに問われている。その端的な一例がたとえば池澤夏樹編の『本は、これから』（岩波新書）だろうが、ここでは多様なジャンルの筆者36名がこのテーマの下に糾合されている。電子書籍の未来に多に期待を寄せるもの、いや在来的な本のよさはそんなに簡単に消えはしないとするもの、双方を眺み合わせて中間的な立場をとるもの等々、人の数だけ区々の思いが展開されているのは当然と言えば当然か。読む者は自らの思いを抱えながら、頷いたり首を傾げたりすればよい。性急に結論を出すには及ぶまいが、ただここで一つ考えておきたいのは、書物ないし本と「読む行為」とは不可分のものだという当然すぎるほど当然のことだ（だが本当にそうか？ 読むという行為はそんなに当たり前か？）。これは、積読という行為(?)を含めてのことである*1。ことを出版産業や情報産業の問題に限る必要はあるまい。

*

ヴァレリー・ラルボー（1881～1957）という作家・批評家がいる。しかし彼は単なる「作家」に止まらず、とりあえずは「豊かな読書人」とでも呼ぶしかない存在だった。数か国語に通じた該博な知識を身につけ、コスモポリタン（今日ではこの言葉自体はいささか色褪せたものと映るが）とも称されたが、あのジェイムズ・ジョイスを見出した存在としても知られ、ここ数年では岩崎力、石井啓子らによる小説集の訳出（『幼なごころ』岩波文庫、『恋人たち、幸せな恋人たち』ちくま文庫）で再び静かな注目を集めている。その彼に『罰せられざる悪徳・読書』という短い美しいエッセイがある（岩崎力訳）。



V・ラルボー『罰せられざる悪徳・読書』邦訳・初版

これは1976年にコーベ・ブックスから刊行され、長く絶版だったが、幸いにして1998年にみすず書房から復刊された。その絶妙のタイトルからわかるように本書は、読書という「悪徳」（この表現自体はローガン・ピーアソール・スミスの詩から採られている）の魅惑と幸福を論じて余すところがない。ラルボーはここで読書にまつわるさまざまな「誘惑」——「初版本や稀観本の蒐集、博識、研究、そして読むかわりにみずからペンを取って書くこと」——を乗り越えた「理想の読者」像を示している。それは、「一介の読者であることに満足し、自分の愛する本、いまのところほとんど人目をひいてはいないが二十年後には有名になっているはずの本を、ひそかに、最良の

友たちに推薦するだけで満足する人」であり、これを〈riche amateur〉とも言い換えているが、にわかには日本語にしがたいこの言葉を敢えてパラフレーズすれば、「真の意味での豊かな教養人」とでもなるうか。

とは言え、教養という言葉は字面は残っているが、内実はほとんど死語と化しているし、わけても「速読」なるものが汗臭く嬉しそうに喋々される昨今では敢えて蒙昧主義的な態度を取って口を嚙むに若くはないのかもしれない*2。少なくともこのエッセイは騒々しいキャッチアップの心性とは無縁であるとのみ言っておこうか(ラフカディオ・ハーンのエッセイ「露の一滴」の美しさに目を瞠ったことがある人ならば、このへんの事情はおわかりだろう)。

*

先に取り上げた『本は、これから』に、近世文学者・中野三敏の一文がある。題して「和本リテラシーの回復のために」。中野はことあるごとに和本という「物としての本」の理解につとめてきた。言葉を変えて言えば、明治以前の、すなわち活版以前の木版本・写本の類をどう保存し後代に伝えるかという問題であるが、その活路を中野は電子書籍に見ようとする。端的には活字から排除されたくずし字のリテラシーをどうするかということであり、今や疑問符のつけられた「近代主義で選ばれた」活字化された「古典」を読むだけで果たしてよいのかという真摯な問いかけである。「`物、[としての本]を電子情報としてだけではなく、具体的に立派に保存・整理する義務は当然のことであり、また、電子化してこそ、その義務はより明確に意識されるようになるだろう。」その気さくな風貌に違わぬ開かれた問題意識にいささか虚を突かれた思いがした*3。

そしてこうした姿勢は書物研究の碩学・森銚三、柴田宵曲にも共通のもので、両者共著の『書物』(岩波文庫)には、書物・読書・出版をめぐる滋味溢れるエッセイが満ちている。もとより、いわゆる電子書籍の趨勢に水を差す気は毛頭ないが、ともすれば性急になりがちなそうした志向に落ち着いて向き合うためにも、森・柴田の〈眼〉は貴重なものと思われる。既に付箋だらけになっているこの書は全編引き写したいくらいであるが、それも行かない。関心ある向きはどうか実際にページを繰られたい。

*1 画家にして装丁家の林哲夫はこんなことを言っている。「本は場所をとる。逆に考えれば、場所をとるのが本の本質ではないだろうか。(…)江戸時代から「朗読、黙読、ツンドク」などという語呂合わせもあったように、ツンドクこそが本の本来的姿だということを昔の人たちもよく知っていたのではないだろうか。」(「ふるほんのほこり 11 積置」、PR 誌『ちくま』2009 年 11 月号)

*2 「リベラル・アーツ」とは一般に大学等における教養教育を指すとされるが、これについて呉智英は「抑圧あつての「自由な学芸」で簡明かつ鋭い見解を示している。(『健全なる精神』双葉社、所収)

*3 装丁家・鈴木一誌は、モノとしての本と電子書籍について次のように言っている。「インターフェース・デザインの重要性を浮上させた電子書籍は、同時に、紙の精妙さをあらためて照らした。紙とデジタル端末が、たがいに切磋琢磨しながら、本の世界を広げてゆく。(PR 誌『図書』742 号、岩波書店)ちなみに彼は最も早い時期からブックデザインにパソコンを導入していた人である。

図書館では、書誌以外にもインターネット上で参考文献等の情報を検索することのできるツールを用意しています。
 今回はその中のいくつかをご紹介します。レポート・卒業論文作成の時の参考資料の収集にお役立てください。
 (図書館ホームページよりご利用いただけます。)

*** ブリタニカエンサイクロペディア (学内限定)**

アクセス方法 **図書館 HP** → **MENU / 学術情報ポータル** → **全般 / ブリタニカエンサイクロペディア**

日本語の『ブリタニカ国際大百科事典』と英語の『Encyclopedia Britannica』をベースとしたポータルサイトです。事件・人物・言葉の意味等の検索に便利！！論文・レポート作成時には、出典表示機能が役立ちます。

【日本語検索画面】



【英語検索画面】

日本語検索画面の「ブリタニカ・オンライン (英語)」をクリックすると英語検索画面に変わります。



* **CiNii** (論文情報ナビゲーター)

アクセス方法 図書館 HP → MENU / 学術情報ポータル → 全般 / CiNii

国立情報学研究所が提供する文献検索のデータベース。全分野にわたる約1,500万件の日本の学術論文情報が収録されています。

機関リポジット CiNii PDF-オープンアクセス CiNii Link1 等のアイコンのある論文はアイコンをクリックすると論文が画面上で確認できます。印刷可能です。(論文の確認は学内限定のものもあり)



キーワードを入力

* **聞蔵Ⅱビジュアル** (学内限定・同時アクセス数2)

アクセス方法 図書館 HP → MENU / 学術情報ポータル → 新聞記事 / 聞蔵Ⅱビジュアル

1945年から当日までの「朝日新聞」の全地域面を収録(沖縄を除く)しており全国各地の出来事が検索可能です。紙面イメージや切り抜きイメージも閲覧できます。キーワード検索だけでなく、日付を限定しての検索も可能。「週刊朝日」「AERA」の記事も収録されており新聞と同時に検索できます。

(学内限定、同時アクセス数2)



キーワードを入力

日付の指定も可能

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」資料調査をめぐって

実践コミュニケーション学科 准教授 加藤 美奈子

近代文学の研究では、個人全集を用いることが一般的である。対象とする文学者の全集が整備・刊行されていればヤレヤレと安堵し、全集未刊の文学者は(特に卒業論文などでは)敬遠しがちである。私が専門としている与謝野晶子には、『定本與謝野晶子全集』(講談社)、『鉄幹晶子全集』(勉誠社)といった索引・校異の整った＝「しっかりとした」個人全集がある。書簡資料に関しても、『与謝野寛晶子書簡集成』(八木書店)を参照し、事足れりとしてきた。もちろん、短歌などの細かい異同を確認する場合、初出雑誌のマイクロ資料の複写、雑誌・初版本の復刻資料を参照する。運よく自筆原稿が文学館等で展示されれば、その一部を目にし、図録等で確認することも可能だが、さほど重視して来なかった。

薄田泣菫(本名・淳介 明治10～昭和20年)は、浅口郡連島村(現・倉敷市連島)に生まれ、文学史的には、『白羊宮』(明治39年)の象徴派詩人として位置づけられている。旧制岡山中学を中退後、明治27年に上京、上野図書館で独学、英詩に学び、明治32年、22歳で第一詩集『暮笛集』を金尾文淵堂より刊行する。島崎藤村『若菜集』(明治30年)によって確立された「新体詩」の優れた作者として一躍詩壇に認められ、与謝野晶子『みだれ髪』(明治34年)にも影響を与えている。詩人として知られる泣菫だが、大正元年に大阪毎日新聞社に入社、ジャーナリストとしても業績を残している。大正7年に芥川龍之介を社友に迎えるなど、文壇と紙面を繋ぐ役割を果たし、有島武郎ら著名な文学者からの信頼を得て、『生れ出づる悩み』(大正7年)など、文学史に残る名作も同紙上に連載された。自らも筆を執り、

コラムを連載、刊行された『茶話』は読者から圧倒的に支持され、現在も評価されている。大正8年には学芸部長に就任、晩年は病を得て度々帰郷、68歳で逝去。平成15年、地元の「薄田泣菫顕彰会」の尽力で、泣菫生家が公開されている。

「薄田泣菫文庫」は、泣菫の遺族から2004～10年にかけて倉敷市に寄贈された書簡を中心とした資料群である。芥川龍之介『地獄変』の別稿が「発見」されたことでも注目を受け、その殆どが未公開の貴重資料である。本学吉備地方文化研究所事業の一環として、この「泣菫文庫」資料の調査・撮影作業を今まさに図書館内で実施している。坪内逍遙、上田敏、与謝野鉄幹・晶子、志賀直哉、有島武郎、武者小路実篤、谷崎潤一郎



倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」
薄田泣菫宛 与謝野晶子書簡
(大正7年)

といった著名な文学者たちの名前が目録に歴々と並んでいる。郷土ゆかりの洋画家で泣菫とも旧知の満谷国四郎、鹿子木孟郎、赤松麟作らに加え、竹内栖鳳、鏑木清方といった画壇の重鎮、島村抱月、松井須磨子、小山内薫ら演劇人の名前もある。それら資料を学生たちと一点一点計測・撮影しデータ化していく。2010年9月より着手し、現時点で約4000点の画像データを撮影、調査カードは1500枚に及んでいる。この調査を基に、与謝野鉄幹・晶子関連の資料の一部を翻刻・研究、本学紀要に発表、「就実学術成果リポジトリ」に数点を公表してきたが、この調査作業そのものから、「モノとしての資料」が私の前に立ち現れてくる実感があった。それは

一方で、これまでの「テキスト」を用いての研究を専らにしてきた自分自身を批判的に問い直す経験でもあった。例えば、与謝野晶子の書簡に「何が」書かれているか、すでに翻刻された活字資料を見ればまあ十分、という感覚があったことは否めない。ところが、実際に晶子の直筆書簡を封筒から慎重に取り出し、広げた時に直に伝わってくるのは「テキスト」以外の「何か」である。影印資料は文字以外の情報を補うものではあるが、特に近代文学の図版資料は本文の部分だけが対象とされていることが多い。書簡の場合、封筒などは消印による日付等の他は殆ど意識されることもないだろう。原物の資料と対峙しているとそれらが、例えば書簡の場合、差出人と受取人の呼吸までを雄弁に物語ることがある。和紙の巻紙、洋紙の用箋、墨跡、万年筆、旅先の絵葉書に鉛筆の走り書き、切手、消印、封緘、時に料紙の折り方・巻き方一つをとっても、時代と書き手の志向・置かれた状況・心境をも「モノとしての資料」が伝え、迫ってくる。

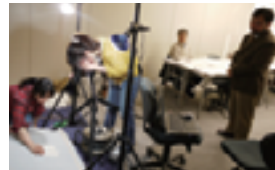
泣堇に宛てた晶子の書簡は、翻刻にも撮影にも苦心させられる薄く小さな特有のくずし方で細々と書きつけられているものが多い。

啓上 皆様お変わりもなく候や。八月になり候て今日が一番あつきやうに候。……いつも歌のおそくなり候て失礼ばかりいたし候。……この頃は投書が一度に百通くらゐまるやうになり候。……三匁の切手をはりにしことみす 不経済のこゝちして心ぐるしく候。(また手紙など同封され候ては返事などにこまり候)

……

この書面は遺族によりすでに公表されており、「薄田泣堇来簡集」(「親和國文」第19号 1984)、翻刻・注記等も綿密で有用な基礎資料である。歌稿の遅延を

詫び、読者投稿に関して改善を求める編集者・泣堇に宛てられた極めて「実用的」な音信である。一方で、調査時に手にとったそれ(写真)は、華やかな花柄の封筒には墨書、用箋には万年筆、と用具が使い分けられ、特に夏に相応しい「蓮の花」の意匠に合わせ、水を思



図書館内の「泣堇文庫」資料調査に庄司達也東京成徳大学教授(右端)が来訪

わせる鮮やかな青を好んで選び送ったのではないかと想像が膨らむ。明治期、詩歌の先達として「すきなすきな泣堇さま」と敬慕した晶子の「気分」が大正期にいたるまで揺曳していたことが、詩筆を折った後の泣堇に宛てた一通の書簡からも伺われるのである。

「近代文学」は、「テキスト」以外の何か、というより「テキスト以外の全て」を意図的に、或いは自明のこととして捨象した上に成立してきたのではないか、という問いかけを、多方面に開かれた「泣堇」という軸を介して痛切に思わずにはいられない。同様に私たちは、CDを音源とし、スピーカーを用い、電気信号で再生される音を、疑いなく「音楽」として受容して来た。そのことは、利便性その他の恩恵をもたらす同時に、私たちは「何か」を失ったのではないか。今秋、本学図書館主催「図書館セミナー

図書館で地域をまなぶ」では、「薄田泣堇が愛でた音楽たち」というテーマで、庄司達也東京成徳大学教授により当時のSPレコード・蓄音機を用いて、泣堇の生きた時代の「音」を再現しようとする稀有な試みが予定されている。「薄田泣堇文庫」資料調査において、文学者たちの「筆圧」までを目前にした時に伝わってくる「何か」に通じる「何か」を体感出来る機会となることを期待している。

三上 延『ビブリア古書堂の事件手帖』
(アスキー・メディアワークス)



鎌倉の片隅にあるという古書店「ビブリア古書堂」、人見知りだが古書に関してずば抜けた知識を持つ店主・篠川菜子と過去の体験から本が読めなくなった店員・五浦が、古書店にやってくる個性的な客が持ち込む古書とそれに関わる謎・秘密を鮮やかに解き明かしていくお話。テンポよく書かれており推理小説に馴染みの無い人にも読みやすい。菜子さんの洞察力 + 古書の知識を生かした推理・古書と持ち主のドラマを解き明かしていく所が秀逸で面白い。また、古書や古いレーベル等のトリビアが細かなところに散りばめられており、ストーリーを楽しみながら本の豆知識が楽しめる。作中に出てくる鎌倉の情景と古書に関わるミステリーを楽しむもよし、読後に作品内で登場する名作を併せて読んでみたくなるシリーズ。

(クローバー)

池上 永一『テンペスト』(角川書店)



時は、琉球王国末期。そこには、才能ある若い役人が国を守るために奮闘しています。でも、まことの姿は女・・・。

男として生きる運命を背負わされた「真鶴」という女の人生と琉球王国の運命が交差している物語です。

(キリン)

苅谷 剛彦『知的複眼思考法』(講談社)



「本を読むとき、その本にだまされるな、批判的読書を行え」の言葉に、何?・・・ナニ? 複眼思考とは、複数の視点から物事を捉え一つの視点にとらわれない物の考え方のこと。そ

の第一段階として冒頭の言葉へと繋がり、創造的読書をすると思慮力を鍛えることができるらしい。具体的な例題やヒントを追っていくうちに、「そんな常識い〜」と知っていることを「あれっちょっと変だな、どうしたらいいかな」と考えている自分が不思議。自分の持っている知識をどのように『考えること』につなげていけるか、考えることによって、その『知識を活かし』ていけることができるか、そんな思考方法の身につけ方がきっとあなたもわかるはず!

(きていはう たう)

池井戸 潤『下町ロケット』(小学館)



とある町工場の一つである佃製作所。そこでモノ作りに情熱を燃やし続ける社長と社員たちの物語です。「その部品がなければ、ロケットは飛ばない。」その最先端技術で我々の意地とプライドが大企業の企業戦略を相手にぶつかりあうのです。果たして、ロケットは飛ぶのか?

(キリン)

山本幸久『寿フォーエバー』（河出書房新社）



ウェディングプランナーの靖子を主人公にしたお仕事小説。彼氏いない歴9年の彼女は結婚式をあげるカップルのために毎日奮闘する。ライバル店の出現、カップルの破局危機、仕

事に追われ合コンをドタキャンなど彼女の悩みは尽きない。自分も幸せになりたいと願う気持ちとは裏腹に、カップルたちに嫉妬し、心の中で毒づく靖子がユーモアたっぷりに描かれている。頑張る靖子に幸せは訪れるのか!?1ページ目から靖子の毒舌がテンポのいい文章で始まり、物語に引き込まれます。まずは図書館で手にとってみてください。あっという間に読破できてしまう読みやすい小説です。

（ありがとウサギ）

水野敬也『夢をかなえるゾウ』（飛鳥新社）



平凡な生活にうんざりしていた主人公が、ある日突然現れたインドの神様・ガネーシャと出会い、毎日出される課題に取り組むことで自分を変えていくといった物語です。ガネー

シャの課題には「靴をみがく」「明日の準備をする」といった一見簡単なものもありますが、それらには深い意味合いが込められています。また、イチローやスティーブ・ジョブズなど数々の偉人に関するエピソードも登場します。この本はビジネスマン向けの自己啓発本としても親しまれており、特に就職活動を進める上ではヒントが得られるかもしれません。またコメディな部分も多く、普段あまり読書をしない方でもとても読みやすいと思います。

（723）



認定こども園 就実こども園の紹介

就実こども園園長 古川 恵子

認定こども園就実こども園が本年4月に開園されました。本園は岡山市初の認定こども園であり、保育所と幼児園の施設が併設され、0歳児から2歳児までが保育所、3歳児から5歳児までが幼稚園として保育と幼児教育を受けます。

開設の理念としては、就実学園「去華就実」の理念のもと、就学前までの幼児に一体的な保育と幼児教育を提供するとともに有機的に組み合わせたサービスを提供し、幼児の健全な発育を図るために総合的な育児支援を行います。また、地域の子育て支援事業を実施します。

《運営方針》

- ①0歳児（6ヶ月）から5歳児（就学前）までの子どもたちを一貫した保育理念・教育理念のもとに指導します。集団生活の中で幼児期に身に付ける基本的な生活習慣も一貫した指導をします。
- ②就実森の学校での活動や身近な自然に触れ、自然体験を通して好奇心や探求心をはぐくんでいきます。
- ③園庭や就実子ども園の菜園で四季の野菜を栽培し、収穫までの過程を楽しみながら収穫の喜びや命の大切さを知らせていきます。
- ④大学・短期大学の附属幼稚園として、教員の研究や合同研究への協力、学生の実習等を通じて教育力の向上等の役割も担います。研究成果は保育現場にフィードバックし、質の高い保育・幼児教育を目指していきます。
- ⑤地域に開かれた施設として、親子ふれ合い活動や育児相談、園庭開放等、地域子育て支援事業を実施します。

《教育目標》

一心身ともにたくましい子どもを育成する—
遊びや生活に意欲的に取り組み元気にのびのび生活する『たくましい子』・好奇心にあふれ、自分で考えて行動し判断ができる『考える子』・人や自然とふれ合い、思いやりの気持ちをもち、心を通わせ仲良くできる『やさしい子』の幼児像を掲げています。人との関わり、自然との関わり等の中で様々な体験を通して学び、生きる力の基礎を育成します。

《保育時間》

3歳児以上は、月曜日から金曜日
8時45分から14時まで保育します。
希望により18時まで保育します。

0歳児から2歳児は、月曜日から土曜日
7時30分から18時まで保育
します。預かり保育は19時までです。

《給食について》

保育所（0歳児～2歳児）は完全給食です。

幼稚園（3歳児～5歳児）は現在は弁当で、希望により給食にしています。

現在0歳児から3歳児の63名の園児がいますが、大学・短期大学の学生ボランティアの方に協力いただき、園児たちが安定し、生き生きと園生活を送るよう援助しています。また大学の先生と連携を取りながら保育・教育の質の向上を図ります。

（就実大学・就実短期大学附属幼稚園）
（就実大学・就実短期大学附属保育所）



園庭



園舎全景



1・2歳児用トイレ



屋上

記念写真 ーボストン旅行記ー

人文科学部 表現文化学科 教授 川崎 剛志

春から夏にかけてボストンは晴天続きだと聞いていたが、ローガン空港に降り立つと雲行きがあやしい。ホテルにチェックインした後、時差ぼけ対策も兼ねて、ひとりでボストン市街を散策した。街の中核をなす広大な公園、ボストンコモンを横切り、ビーコンヒルを上り、下り、もう一度上っているところで、案の定、雨が降り出した。傘がない。いつもまあ、こんなものだ。古風な街並みはシャワーを浴びて一層美しく映えたが、雨宿りを許すような軒先が見当たらない。坂の下に、高架が見えた。首にかけたカメラを濡らさないようにブレザーの内に抱え込みながら、不恰好に坂を駆け下りた。高架下に飛び込むと、そこは地下鉄 Red Line の Charles/MGH 駅の裏口だった。たまにはまあ、こんなこともある。

ボストンの地に降り立ったのは、5月17日・18日にハーバード大学ライシャワー日本研究所で開催された国際研究集会「Beyond Sectarianism : New Horizons for Interdisciplinary Studies in Japanese Buddhism (日本仏教研究の領域複合的解明の試み—宗派性の超克)」に参加するためだった。個別の宗派研究が盛んな一方で、それが必ずしも日本仏教の全容の解明に結びついていない現状を反省し、宗派を超えた日本仏教のありようを探求する、というのが、この研究集会の趣旨だ。プログラムは、パネル1「東アジア交流と宗派仏教前史」、パネル2「汎宗派的仏教史への視座」、パネル3「国家のかたちと仏教との相関」、パネル4「仏教学と周辺学術分野の新しい関係」、パネル5「歴史的研究と古代・中世日本仏教」、パネル6「東アジアの歴史と日本の仏教の発展」。日本人10名は日本語で、アメリカ人8名は英語でそれぞれ発表し、パネルごとに参加者全員で議論した。私のように英語を理解する能力の低い者のために、英語のペーパーは日本語訳され、英語の発言は、逐一通訳された。今回の議論のルールはふたつ。ひとつは単刀直入に述べること、もうひとつは、日本人の発表についてはアメリカ人が議論の口火を切る、アメリカ人の発表については日本人が議論の口火を切ることだった。各パネルの議論のために用意された30分間は瞬く間に過ぎ、昼食、夕食、それから翌日の朝食と、楽しく、発展性のある議論が続いた。

私はパネル3「国家のかたちと仏教との相関」で、「南都仏教のなかの修験」という題目の下、修験道を包摂したかたちの中世日本仏教のありようを提示した。時差ぼけのせい、はじめは思うように舌が回らなかったが、リラックスしているから大丈夫だと自分に言い聞かせた。後半にさしかかると、「鎌倉後期には鑑真が山伏修行をしたと語られるようになる。苦勞の末、日本に来ていただいた鑑真さんに山伏修行をさせるなどナンセンスだ、なんて言っているうちは、鎌倉仏教における修験道の位置は見えてこない。それこそナンセンスなんです」と、アドリブも入るようになった。発表を終えて議論に移るころには、心身とも普段の状態に戻っていた。無意識に半身に構え、発言と同時に両手が派手に動いた。



HarvardのCoop(クープ、書店です)

ところで、両日の間、研究集会の会場にカメラを携行したのは、全参加者のなかで私ひとりだった。初日、ホテルを出るときと会場に入るとき、日本人の参加者全員に声をかけて集合写真を撮った。さほど映りはよくなかったが、これから何枚も撮るのだからと、無造作にカメラをバッグにしまい込んだ。ところが、会場に入ると、カメラを取り出すタイミングがつかめない。参加者は誰も、フレンドリーで、フランクだったが、「みんなここに集まって、ハイチーズ」という雰囲気ではなかった。初日の夕食会場、Harvard Faculty Clubでもそうだった。この会員制レストランで会食する機会なども二度とないだろうから、生涯の思い出に、と強い決意で臨んだが、二階の一室に通されると、すぐにレセプションが始まった。ワインを片手に談笑の輪が広がると、もうお手上げた。その上げた右手で、白ワインのグラスを取った。結局、集合写真どころか、会議中、会食中のスナップ写真さえ撮れなかった。

二日目の夕食後、名残を惜しんで、日米の研究者十数名がホテルのレストランで談笑を続けた。そろそろ散会という時になって、ひとりのアメリカ人研究者が



昼間のHarvard Faculty Club

スマートフォンを取り出した。「こんなに楽しくても、すぐに顔と名前を忘れてしまう。それがいつも残念だ。名刺を渡してくれれば、写真を送るよ」と。私はあわてて名刺を取り出し、正式な自己紹介を怠った非礼を笑顔で詫びた。

私に足りなかったのは、場の雰囲気を無視してカメラを構える蛮勇ではなくて、場の雰囲気を解きほぐす言葉の力だった。

レファレンス・サービス

人文科学部 総合歴史学科 講師 松崎 博子

‘レファレンス(reference)’という単語は聞き慣れないかもしれないかもしれませんが、レファレンス・サービスは全国にある全種類の図書館(公共図書館・大学図書館・学校図書館・専門図書館・国立図書館)で行われている図書館の基本的なサービスです。‘参考調査’‘読書相談(読書案内)’と呼んでいる図書館もありますが、‘レファレンス’とするのが一般的でしょう。

レファレンス・サービスとは、『図書館情報学用語辞典』によれば、「何らかの情報あるいは資料を求めている図書館利用者に対して、図書館員が仲介的立場から、求められている情報あるいは資料を提供ないし提示することによって援助すること、およびそれにかかわる諸業務」を指し、「図書館における情報サービスのうち、人的で個別的な援助形式をとるものをいい、利用案内(指導)と情報あるいは資料の提供との二つに大別」されます。

レファレンス・サービスは、19世紀中葉のアメリカ公共図書館で始まりました。アメリカの公共図書館では、20世紀初めから開架式(利用者が開架書架に入ってブラウジングする方式)が導入されるようになりますが、それまでは閉架式だったので、閉架書庫に立ち入れない利用者が図書館目録で読みたい本を探し、出納カウンターにいる図書館員にそれを請求していました。図書館目録の使い方に習熟していない者に図書館員が使い方をお教えたのがレファレンス・サービスの原形です。

1876年、マサチューセッツ州ウスター公共図書館のサミュエル・グリーン(1837-1918)がこれを‘人的援助(aid to readers)’と名付け、そこから引き出される現実的利益を提示し、各公共図書館での実施を呼びかけました。(実は、この‘人的援助’を通して、労働者階級の読書をコントロールしようとしていたという話もあります。フィクションなどの軽読書を好む利用者に折を見て高尚な本を与え、彼らの読書嗜好を向上させることで、上流階級や中産階級に属する人びとの、図書館に対する評価を高めようとしたのです。(S・S・ローズスティーン著『レファレンス・サービスの発達』))

19世紀末までは、各図書館の目録係が自館に所蔵されている資料の目録をせっせと記述し、閲覧に供していましたが、1901年、納本制度に基づき国内の出版物を網羅的に収集するアメリカ議会図書館から印刷カード目録が各図書館へ頒布されるようになると、**目録作業の省力化と一元化**が進みました。さらに、各図書館の蔵書目録を合わせた‘**総合目録(union catalog)**’が作成され、図書館間の協力の下に**相互貸借(inter library loan)**が行われるようになりました。

利用者が本を探す範囲は身近な図書館から全国の図書館へと広がりました。図書館員は、利用者が自身のニーズに見合ったすべての本を探し出せるように、ほかの資料への案内や指示を主目的とする書誌や目録を編纂するように



大学図書館のレファレンス・カウンター
(於・フィラデルフィア市)

なりました。これを‘レファレンス・ブック(参考図書)’と呼びます。(ここでいう‘書誌’とは、本に関する情報の集合体で、書誌情報に所在情報を付け加えたものが‘目録’です。)

学問の成熟とともに‘レファレンス・ブック’も高度化し、その製作の場は公共図書館から大学図書館へと移りました。‘書誌の書誌’として有名な *Guide to Reference Books* (1902-) はイリノイ大学図書館のイサドア・マジ(1875-1957)が編纂したものです。‘レファレンス・ブック’を編纂する、あるいは、それらを上手く使いこなすことが図書館員としての技能の表れとみなされた時代でした。

それから 100年後の現在、レファレンス・サービスはサイバー・スペース上で展開されています。各図書館の図書館員が特定テーマの文献探索案内‘パスファインダー(path finder)’を作成、発信しています。また、日本の国立国会図書館はレファレンス情報源データベース「リサーチ・ナビ」(<http://rnaivi.ndl.go.jp/rnaivi/>) や「レファレンス協同データベース」(<http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>) を一般に公開、提供しています。有用なレファレンス・ツールです。

さらに大学図書館では、主題専門性を備えた、文献に関する専門家‘サブジェクト・ライブラリアン’を配置する傾向にあり、データベースやインターネットの検索エンジン(Googleなど)では回答が得られない、大学生・研究者(教員・大学院生)からの高度な質問に彼らが回答しています。この高度なレファレンス・サービスを行うことで、大学図書館は利用者から信頼されているのです。(斎藤泰則「情報探索者が捉えたインターネット環境における情報源としての図書館および図書館員の特性」『現代の図書館』Vol. 45, No.1, pp. 32-40.)

また、それとは別に、総合大学の図書館でよく見られるのがレファレンス・カウンターに(アルバイトの)大学院生を配置するというものです。OPAC(オンライン閲覧目録)や書誌データベースの検索方法、レファレンス情報源に関する知識を伝授したり、専攻分野に関するレファレンス質問に回答したりします。

最近、大阪大谷大学では、特別なプログラムを受講した司書課程学生が‘学生インストラクター’として 1回生の図書館利用を支援しているそうです。(中道厚子, 前川和子「図書館学生インストラクター養成の実施とその効果を高めるための考察」『日本図書館研究会第53回研究大会予稿集』2012, pp.14-19.) これも学生同士が‘情報リテラシー’を共に学び合う、レファレンス・サービスの新しい形といえなくもありません。

リアリティについて

人文科学部 表現文化学科 講師 小林 敦子

庭では寒椿の花の盛りが過ぎ、ひよどり、笹鳴の声も例年にくらべて、毎日のように声のちがった種類が渡っていた。しかしまだ侘助の花はひらかず一どころ菊のあかりを見せた庭は、振り返った胸を見せるような初冬の緊めあがった姿を、毎日甚吉に見せてくれた。在るところのものは在りどころに定まった美しさは、庭全体の釣合を深くし、互に均整を張り合っていて、緩みがないほど響を持っているようだった。なにか網を張ってあるようで或時刻には甚吉ですら庭に出ることを控えるくらいの、まとまり方であった。

大正・昭和期の文学者、室生犀星の「虫寺抄」の一節です。日に日にふけゆく秋の庭の世界・虫の世界を描いた作品で、小説のようですが、物語は虫の側にあり、人の側にはなく、とても不思議な面持ちがあります。高校生のころ、この作品を読んで驚いたのをよくおぼえています。

私を惹きつけたのは、ひとつ一つの場面の描写なのでした。静かに冬を待つ庭の薄暮の大気が、はっきりとそこに感じられるのです。それは目に浮かぶ、思い浮かぶ、といった感覚ではなく、静寂の中でじっさいに頬が霜の気温にふれ、庭の土のにおいをおぼえ、あたりと一緒に自分が暗くなっていくような自分の体の変化でした。本当に犀星と一緒にその場にいる、と言うべきで

しょうか。私は何かを見てもないし、聞いてもない、しかし私には映像を見るより、はるかに体に届くリアリティがありました。文学とはこういったところまで表現出来るのか、と目が覚めるような思いでした。

どうして直接的な感覚にうったえることのない、言葉の表現に、自分の体のさまざまな感覚が応えるのか、これは文学の根源にある問いかもしれせん。多くの人間が言葉によって世界を把握しているとするなら、もしかすると、言葉の表現は、あるとき直接的な感覚よりも、速く、深く働くのかも知れない、高校のころから未だ考え続けています。かえりみれば芸術とは、自分の得た感覚を、伝えると言うより、起こすということに本質があるようにも思います。寒いということを理解してもらいよりも、寒さを感じてもらい。感覚から理解へ、ではなく、感覚から感覚へ。その非凡な営みを、犀星はとてもよく果たすことのできた作家なのでしょう。

犀星を読んだころ、出会ってまた驚いた画家がいました。フランスのカミーユ・コロドーです。地中海の陽がただよふ森の夕闇を描いた風景画は、何か自分の知っている画と違うと思いました。犀星の文学と同じことでもあったのです。コロドーは、風景をガラス窓の向こうの光景として捉えているのではなく、その場にあるものとして捉えている、目に見える森の姿だけではなく、自分



カミーユ・コロー
【カステルガンデルフォの思い出】1865年頃 ルーヴル美術館所蔵

と、その森までの空気をも描いている、森の湿度、灌木の香り、そして次第に暗くなっていく宵の光芒、その場のすべてをコローは画にしているのです。コローの画の前に立つと、実際に森の中にいると感じます。画ですから、目という直接的な感覚にうったえるようですが、コローは、ただ見るとは全く別なことをしているのでしょう。

時代によって言葉を変えてあらわれますが、リアリティやリアリズムといったものは、ずっと私たちが手放してはいけない問いのように思います。その場に無いものが、本当にあると感じられる。私たちがその場に無いものをあるかのように扱う時は、自分のぼんやりした観念を織りまぜて補います。しかし優れた作品と向き合うとき、私た

ちはその必要も無く、今この場にある、と信じることができるのです。そして恐らくそれは幻影ではなく、現実なのです。芸術は嘘であり、自由な夢想だと言ってしまうのは簡単です。しかしリアリティといったものと手を切ってしまうえば、犀星やコローの実現した世界から遥かに遠ざかってしまうでしょう。犀星もコローも、どこか幻想的な作品を残しています。けれどそれはひたすら真摯なリアリティの追究のさきに出会った現実の世界なのです。彼らの作品と出会うたびに、リアリティを求める迷いの無さに心を打たれます。

面倒な調べ方にも意味がある

人文科学部 表現文化学科 教授 松尾 直昭

論文作成に必要な資料蒐集について話します。ここでは、雑誌所収の参考文献にやや比重を置いています。そもそも、論文とは自分で感じ取った問題を説明する行為で、その問題の重要性を確認しながら、想定した結論に向かって論証していきます。この際、ひとりよがりの理解やら、根拠のない思いつきなどを自己批判的に排除する必要があります。参考文献を蒐集して、研究史を自分で整理しますが、これは、研究史のなかに自分が主張しようとする問題点を取り扱われていて、検討するに妥当かどうかを確認する作業でもあります。

学生達のようにすをみていると、問題点を提示することが極めて困難なようです。作品をどういう風に説明すれば良いのか、「自分がひっかかっている作品の特徴をどう説明すればよいのか」「どうすれば問題になるのか」、悩みながら、問題を説明しようとしてもあらずじにしかならないようです。自分の言葉で説明できないからといって、参考文献を引用しすぎると、他人の言葉の引き写しだけになってしまい、だんだん、自分のイメージを見失ってしまいます。参考文献は必要ですが頼りすぎると自分を見失ってしまうものです。「頼れば見失う、見下せば証拠になる」といいますが、その際には自分の考えをつかみ取っていることが前提です。

さて、まず、いったいどういう参考文献があるのかを探すとしましょう。一番簡単なのはネット検索を利用することです。国文学研究資料館の論文目録データベースにアクセスし検索画面で探し、プリントアウトすれば、たち

どころに主要な参考文献一覧が入手できます。便利ですがその便利さゆえにこれをあまり勧めません。ひとつには、例えば『心』という作品の参考文献を探すにしても、検索キーワードを「こころ」「心」「こゝろ」と論題を替えて検索しないと正確にヒットしないでしょうし、「漱石」、「夏目漱石」という語との組み合わせをも色々試してみる必要があります。知恵比べみたいで面白いかもかもしれませんが、検索の性格に合わせるというのも少々めんどろです。それに、もうひとつは、考えるという行為は、からだ全体の動きをともなった行為でもあるからです。開架式の書棚



に配置してある本の背表紙を見ながら、書誌のコーナーを目指している間にも我々はいろいろな情報を捉えているはずです。わだかまっているイメージを鮮明にし、意識上に浮上させる運動が、からだの動きに付随して起こっているのです。ふだんの行為の中で問題解決のヒントがひらめくということがままありますが、からだの動きが意識活動を活性化させるのでしょうか。頭で考えず、納得のいくようにからだで考えるとも言います。ですから、参考文献のリストアップは、図書館の中をめぐりながら、本に囲まれた環境の中で、国文学年鑑を年次ごと、一冊ずつ調べるとを勧めています。

夏目漱石『こころ』（新潮文庫）

人文科学部 表現文化学科3年 大西 奈緒美

日本人ならば、知らない人はいないのではないかというほど有名な夏目漱石の『こころ』。高校の教科書にも一部分が載っているので、名前だけでなく内容も知っている人が多いと思う。わたしがこの作品と初めて出会ったのもこのときだ。しかしそんな有名な作品にも関わらず、実際に本を手にとって読んだことがある人は少ないのではないだろうか。

『こころ』は、上・中・下の三部構成になっている。上では先生と私の出会いと交流、中では大学を卒業して国に帰った私と私の両親の交流、下では先生が私に送った遺書の内容がそれぞれ書かれている。

あまり自分のことを語らない先生だからこそ、私に対して語る「私は寂しい

人間です」「恋は罪悪なんだから」といった断片的な言葉が重みを増す。謎に包まれた先生の人生は、遺書の中で詳しく明かされる。ここで初めて断片的だった言葉の本当の意味を理解することができるのだ。

『こころ』には、当時のわたしでは理解できない部分もあった。今読むとその部分が理解できるようになっていて、当時とは感じ方が随分と異なることに気付く。

あなたは今何を感ずるのか。『こころ』は本学の図書館にも置いてあるので、是非読んで確かめてほしい。



ジェイドナビ・ジン 文・絵 深川明日美訳『あかいハリネズミ』（リトルモア）

人文科学部 表現文化学科3年 柴田 歩実

あなたの周りには、何人友達がいいますか。同じ学科、同じサークル、同じゼミ、そして、大学生になる前からの友達。今回は、そんな誰かの友達であるあなたにお勧めしたい本を紹介します。

ジェイドナビ・ジン文・絵『あかいハリネズミ』は、タイトル通りの赤い表紙が目立つ、ほんわかした色鉛筆画の絵本です。ある日、コハリネズミはたった一人の家族である母親を病気で亡くしてしまいます。一人ぼっちになるコハリネズミに、母親は最期に言いました。「友達を見つけてなさい。」友達の条件はただ一つ「あなたを抱きしめてくれる人よ。」

私は大学生になった今が一番、友達という温かさを強く感じています。友

達とは何か。大切に思っている友達に、自分は抱きしめてあげられる友達になれているだろうか。コハリネズミのトゲ、心の刺をも恐れずに抱きしめてあげることができるのだろうか。1ページめくるたびに、自分を振り返って考えさせられます。

さあ、コハリネズミは友達を見つけてことができるのでしょうか。そして、コハリネズミは、なぜ赤くなったのか。この本の英題は、『Could you hold me?』。あなたは、抱きしめてあげられる友達になれますか。



よしもとばなな『デッドエンドの思い出』（文藝春秋）

『デッドエンドの思い出』は5つの短編小説から構成されている。中でもタイトルにもなっている「デッドエンドの思い出」は、私たちの日常の見方を変えてくれる。人との出会いや、過ごした日々、幸せだったことを主人公は「神様がふわっとかけてくれた毛布」であり、「二度とは再現できない」ものだという。そして「死ぬときに幸福の象徴としてきつときらきらと私を迎えに来る輝かしい光景のひとつになるだろう」と思う。

人との出会いはすごい確率で、この

人文科学部 表現文化学科4年 武政 汐香

幸せな一瞬は二度と同じものを味わうことはできないものかもしれない。この本を読めば、日常感じている「幸せ」が、愛おしく、そして輝くものになるだろう。作者であるよしもとばななさんの温かで、優しく包み込むような表現を堪能しながら、日常を見つめなおしてはいかがだろうか。



伊坂幸太郎『オー！ファーザー』（新潮社）

タイトルの通りに父親がキーワードとなる。主人公、由紀夫は牛蒡男にからまれ、友人を助けたことから、事件に巻き込まれる。その結果、彼は誘拐



されてしまう。どこに父親の要素があるのかと思うが、由紀夫には父親が四人いる。その父親たちが巻き込まれた由紀夫を助けようと協力す

人文科学部 表現文化学科4年 森山 智代

る。一人でも四人でも子を持つ親には変わらない。

そんな中、「寂しさも四倍なのか」と言った由紀夫の言葉が印象的だ。家族はいつかなくなる。人数が多ければ別れも自ずと多くなる。それでも「寂しさも」と言った彼はそれ以上に楽しさや学ぶことが四倍だと自覚しているようだ。

四人の父親は彼に何を教えたのか、母親はどんな人なのか。母一人子一人父四人のごくごく一般的な家庭の話を、ぜひ一読してほしい。

木村三郎『名画を読み解くアトリビュート』（淡交社）

絵画を見るとき、解説パネルで得た知識をもとに、どのように描いたかを想像しながらなど様々な見方があると思うが、西洋絵画を見る上で新たな視点を与えてくれる本を紹介したい。

書名のアトリビュートとは、美術史用語で「持物」とされ、ある物が特定の事物や現象、神や人物を表す「印」のことである。四葉のクローバーが幸福の印とされているように、美術史の中で薔薇はヴィーナス、帽子は自由のアトリビュートなのである。

人文科学部 総合歴史学科4年 見附 幸子

この本の第一部では名画を用いアトリビュートについて解説しており、第二部では基本的な58のアトリビュートが多く、この本を読むことでアトリビュートから絵画に込められた意味内容を読み解く新しい絵画の見方、楽しみ方ができるのではないだろうか。



第2回就実大学図書館セミナー無事終了しました! たくさんのご参加ありがとうございました!

平成23年10月29日(土) 13:30から、
第2回就実大学図書館セミナーを99名の
参加者を迎え行いました。

「仏像の伝えるものー像内納入米の
DNA解析結果についてー」と題し、講
師は土井通弘(人文科学部教授)と中西
徹(薬学部教授)。異分野コラボレーシ
ョンセミナーでした。



瀬戸内市餘慶寺本堂(本尊)木造千手観
音立像から、寛永二年(1625年)納入の
五穀や銅銭などが発見された驚き。ま
た、納入米は現有品種の祖先であり、
米のDNAを解析することは東日本の稲
作に貢献できる技術につながるのでは
ないかという期待。一粒の米が、仏教
美術・歴史・最先端の科学技術・また住
居している地域に繋がっている話に、
みなさん興味深く耳を傾けていました。



赤米吉備団子を召し上がっていただ
いた後は、図書館へ移り、講演関連パ
ネルや図書館見学。館内でも専門的な質
問が飛び交いました。

次回も地域の皆さんの期待に応えられ
るよう、より充実させていきたいと思っ
ています。どうぞご参加くださいね!

ブレイクコーナーがオープンしました!!



入館ゲート左奥に「ブレイクコーナー」
がオープンしました。

勉強・読書の息抜きにご利用ください。

飲み物のみOK!

食事は学生会館等をご利用ください。

【一緒に快適空間を作ろう】



図書館に来る時は、必ず学生証を持参してください。



図書館では静かにしましょう。(3階に上がる階段の声は館内に響きます。イヤホンからの音もれにも気をつけてくださいね。)



携帯電話はマナーモードにしてください。



図書館内は飲食厳禁です。
(飲み物のみブレイクコーナーでOKです。)



手に取った本は元の場所に戻しましょう。(分からないときは各階の返却台に置くか、カウンターに持ってきてくださいね。)

【図書館とマナーについて】

図書館には、友達と一緒にいきますか？ それとも一人ですか？ 決まった時間に行きますか？ それともぶらりと立ち寄っていますか？ ひとりひとり目的は違っていますが、図書館という同じ空間で同じ時を過ごしています。だから、マナーがあるのです。

たとえば、集中して勉強をしたい人がいるのに、他の人の話し声がそれを阻んでしまうのです。その気持ちに気がつきませんか？ 自分のためだけではなく、みんなのために、共に快適空間をつくっていきませんか。

お
知
ら
せ

第3回図書館セミナー・図書館で地域をまなぶ

薄田泣菫が愛でた音楽たち — 蓄音機&SPレコードで聴く —

倉敷市出身の薄田泣菫が伝える、大正10年に初来日を果たした世界的ヴァイオリニストのミッシャ・エルマンの印象とは？ そして、彼が奏でた音楽とは？

開催日：2012年10月6日(土)

時 間：13:30~16:00

報告者：東京成徳大学教授 庄司 達也 氏

申し込みはFAX086-271-8275またはE-mailでlib@shujitsu.ac.jp

共翔 第20号

編集・発行
就実大学・就実短期大学図書館

平成24年6月20日発行

〒703-8258 岡山市中区西川原1-5-22 TEL(086)271-8134(代) FAX(086)271-8275
ホームページ <http://www.shujitsu.ac.jp>

※館報の題字は押谷善一郎学長の書によるものです。